

# 集落ぐるみの転作を

逆境を生かして、明日の農業を目指すためにも

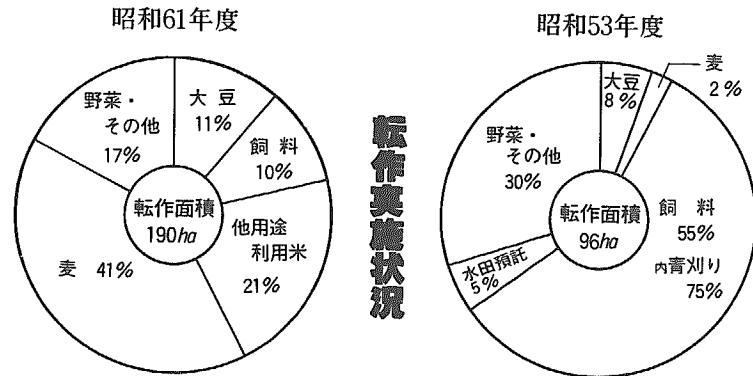
昭和46年、減反（稲作転換対策）がはじまった。そして51年-52年には水田総合利用対策、昭和53年、水田利用再編対策事業が始まり、1期（53年-55年）2期（56年-58年）3期（59年-61年）の計画期間が過ぎました。需要に見合った農業生産の再編成が求められたとはいえ、農業にとっては年々厳しさを増してきたことは事実です。このような中で、「水田利用再編対策事業」が終了し、今年から新たに「水田農業確立対策事業」が6年計画でスタートします。こうしたなかで、農家のみなさんは転作に対して、どのように考え、そして取り組んでいくというのか、次代の農業を担う若い農家のみなさんにいろいろお話をうかがってみました。

## 避けて通ることのできない転作

余っている米の生産を抑え、外国からの輸入に頼っている主要穀物を増産し、食糧の自給を図ろうと、昭和五十三年にスタートした「水田利用再編対策事業」。この事業が始まったとき、ほとんどの農家のかたは、農業に対して大きな迷いと不安を持ったと思います。そのために、転作に対してもその取り組み方は、おのずと消極的にならざるを得ませんでした。事実昭和五十三年には、その対応は緊急避難的な考え方から、主要穀物の増産という転作主旨にはほど遠い、稲の青刈りがその主なものでした（円グラフ参照）。また、専業農家が減少し所得を農業以外に求

める農家が増えたことや後継者不足などの問題が、稲作より手間のかかる畑作物への転作をにぶらせた原因でもあります。しかし、米の消費が年々減少している反面、反当りの収量は伸び続けている、余剰米はますます増えてきました。このため、今年からスタートする水田農業確立対策では、水田の二二・二%に当たる二百五十七ヘクタールという厳しい転作配分を受けました（六十一年度より七十四ヘクタールの増）。このような情勢の中で、転作はもはや避けて通れないものであり、厳しい転作に対応するためには、少しでも収入のあがる転作物を栽培し、バラ転

## 転作実施状況



作から集団化で転作を行うことがさらに必要になってきました。また、地域

の特性に合った合理的な輪作農法の確立も求められています。

## これといった決め手のない転作!

### 情報交換で新たな展開を



田島静夫さん (石瀬・24歳)

「時勢が時勢だけに、転作もしようがないと思います。しかし、転作といっても土地の有効利用をはかる手だてはまだまだ模索状態だし、麦や大豆といったも思うような収穫をあげられないんです。米に見合う収入があるもの——そうですね地域の特産品というか、目玉商品的なものを開発しなくてはならないのではないですか。」

まあ個人的には、集団化をやっていくことが大切だ、と考えていますが、個人個人の農家では対応できない点も多いため、行政や農協などが転作の技術的なサポートをしたり、この作物を作れば、米に見合う収入があるんだ、という一貫した指導が欲しいですね。また、農家はとかく情報が少ないんです。とくに僕のような年代の後継者が少ないせいもあります。もともと情報を入りやすい場、交流の場があると、その辺から新しい農業への対応も生まれてくるような気がします。僕自身も

現在、こんなものに取り組みたいというプランは持っているんですが、情報不足でなかなか対応できない状況ですから……」。

### 足腰の強い農業経営を



堀越正木さん (北野・40歳)

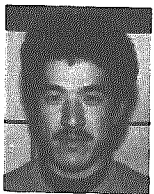
「わたしは転作がスタートしたころ、野菜のハウス栽培に取り組んだんですが、結果は、大風でハウスが壊れたりして、喜べるものではなかったね。そのうえ、米に見合うだけの収入がなか

ったんだ。やっぱり「たんぼ」は米だなと思ったね。そりゃ、最初は建設的な姿勢もあったが、わたしが学校を卒業して農業に青春を燃やしたはじめの当時は、「米百万」達成なんていう状況のころだったから、すぐ米作りに愛着があるみたいですね。しかし、時代は刻々と変わり、食生活の面でも変化がある中、米作りだけにあぐらをかいてきたつけが来たような感じがしま

## 積極的に取り組む姿勢を失わずに

す。また、第二の農業改革といわれる農業機械の普及で、専業農家が激減し、兼業農家が増えてきたことなども転作への対応をにぶらせた一因かも知れませんね。しかし、そんなことばかりは言ってられないね。農家自身の努力は当然ながら、行政や農業機関ももっと中核農家の育成などに本気になって取り組んで欲しい。そして足腰の強い農業経営ができるよう、お互い将来を展望しながらがんばっていかなくては……」。

### 指導者の育成を重点に



大岩 稔さん (原・31歳)

「転作——非常に厳しいことですが、しかたないといえればしかたないですね。ただ、どのように対応していくかが問

題ですね。わたしのところでは、いまえだ豆に取り組んでいます。やとと純益を得られるところまで来ましたが、通年性のものではないので、それこそ短期決戦です。それから見ると「稲」は楽だな、と少し感じています。岩室村は地理的に有利さがあるのですから、今後は稲プラス野菜をやってみたい……と考えています。いま、冬場になるとほかの仕事に出ています、ハ

## 転作を「福」に転じて……

「農家にとって、転作は大きな『荷物』です。これをいかに『福』に転化していくかです。農家である以上、せっかくなので転作するのであれば、収穫の喜びにつながり、いいものを作るといふ姿勢を持ち続けてほしいですね。そのためには、転作物物の安定生産にもつながる『地域輪作農法』に取り組んで欲しいと思います。明日の農業を明るくするために、積極的に転作に取り組んでください。もちろん村その指導・助言には最大限の努力と英知を結集して行きます。」